

「自己責任」

今年（平成16年）4月にイラクで起きた邦人人質事件で「自己責任」ということが大きな問題になりました。

通常、こうした事件で人質の自己責任が問われることは、まずありえないのですが、今回の事件に限って、なぜ、そんなことが問題になったのかというと、事件当初に見せた人質の家族の言動にあったように思います。

テレビや新聞で見る限り、ご家族の方からは、事件を起こしたことへの謝罪の弁はなく、ただヒステリックに国の責任を追及し非難するばかりでした。

そうした家族の姿を見た人々が、
「それは、少しおかしいんじゃないか。国の退避^{たいひ}勧告を無視して、イラクに出かけるなどという軽率な行動をとっておきながら、人質にされたからといって、国の政策を非難し、おまけに救助を求めるとするのは、余りにも身勝手すぎるんじゃないか。責められるべきは人質になった人間の行動にあるのではないか」ということから、やかましく言われ始めたように思います。

もっとも、このような状況下で、ご家族の方に冷静な言動を求めるのは酷なことかもしれません。しかし、今回の事件に限らず、いつの頃からか私たち日本人は、自分に不都合なことが起きると、己の非を棚にあげ、「あれが悪い、これが悪い」と、他人の責任を追及し、非難することが多くなりました。

これには、色々な原因があろうと思いますが、その一つに、余りにも「個」を尊重する戦後の民主教育というものが吐きちがえられ、「自分さえよければ」という風潮をはびこらせたのではないかと思います。

その結果、私たちの国は、個人のエゴ、家族のエゴ、企業のエゴ、国のエゴ等々に覆^{おお}われた「エゴ社会」を作り上げてしまったのです。

今回の事件でも、そういう家族のエゴをむき出しにした態度に国民の多くが嫌悪感を抱いたのだと思います。

そこで、この自己責任ということ、仏教の人生観を通して味わって見たいと思います。

お釈迦さまは、
「この世の中は縁起の道理（因果の道理）で動いている。だからその道理に従って人生を歩みなさい」と説かれました。

これには、二つの大事な人生観が示されています。

一つには、

「我が身に起きることはすべて、自分がまいたタネである。だから自分で刈り取らなければならない（自分の責任において果たしていく）」という人生観です。

また、一つには、

「いのちはみんなつながっている。だから私に関係のないものは何一つない」というものです。

ここで言う、「自らまいたタネは自ら刈り取る」、ということが、仏教で説く自己責任ということになります。

当たり前といえば、至極当たり前のことですが、私たちの人生には、「これしか道がない。こうするより他なかった」といったことがあります。そのことによって、我が身に何が起ころうとも、それさえも自らの責任において果たしていかなければなりません。

このように、「いかなることに出くわしても、我が人生は我が責任において果たしていく」という仏教の人生観こそ、まさに自己責任ということを示したものだと思います。そこには、他に責任を転嫁したり、非難するといったことはありません。それどころか、そんなことをする方が間違っているということになります。

それは結局、『独生、独死・・無有代者』（無量寿経）と、言われるように、私たちの人生は、「代わってもらふことの出来ない一人の人生を、一人して歩む」ということに他ならないからです。

また、今一つの仏教の人生観である、「いのちはみんなつながっている。だから私に関係のないものは何一つない」ということですが、これは「何を見ても他人事とは思えない」という生き方を教えています。

この人生観に立って、今回の事件を考えるならば、「たとえ立場は違っても、お互いが、『自分のこと』として受け止めていく」ということがなければならぬと思います。

「見てみ一、あんな軽率なことするからこんなことになったんじゃ。自業自得じゃ」といった声が多くありましたが、厳に慎むべきことであります。

今回の事件で言えば、

「自衛隊派遣」という道を選んだ（タネをまいた）国は、この事件を、国の自己責任として受け止めていかなければなりません。

また、その国を構成している私たち国民一人一人にも、それに連なるものとして当然、自己責任（連帯責任）があるでしょうし、人質の家族、或いは人質に関わってきた人々、団体にも、同じことが言えると思います。

このように、たとえ立場が違っていても、夫々が自らの責任として、この事件を深く受け止めていくことが何より大事なことです。そうして、人質の一日も早い開放に向けて、自分の出来ることを精一杯努めていく。それが、自己責任の正しい受け止め方だと思います。

私は、今回の事件を通して、お互いが自らのエゴをむき出しにして、他を非難することしかしない姿を見て、果たしてこの日本の国の将来はどうなるのだろうか、危惧の念を抱かざるを得ませんでした。

それと同時に、今、私たち日本人に求められているのは、こうした仏教的な人生観ではなかろうかと、強く思ったことでした。

平成16年8月 「光明寺だより35号」より